

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標に
全教会心定めの達成」

◇こどもおぢばがえり◇

最高な夏が キミを待っている!
2025 7/27~8/3

◇大好評の2つのセミナー◇

■よろこびセミナー

修養科を志願される方や、もっと日常生活やお仕事をイキイキと楽しく過ごしたいという方に参加していただきたいセミナーです。

■ひながたセミナー

修養科を卒業された方をはじめ、改めて「おやさまのひながた」を学びなおしたいという方に参加していただきたいセミナーです。

※興味がある方は教会まで!



大教会のHP がご覧になれます!

月報には掲載されない写真もいっぱいです!

ぜひ一度ご覧下さい♪



発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会六月月次祭

大教会6月の月次祭は、12日午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「祭典終了後には、少年会本部委員、西正一郎先生をお迎えし、少年会縦の伝道講習会を通して、ぢばの理を賜りますこと、心より御礼申し上げます。私共教会長を始め用木

少年会 縦の伝道者講習会



西 正一郎先生

本日私は、少年会の委員という立場で来ておりますが、以前は学生担当委員会を、その前は、青年会の委員もさせていたおりました。

これまでにいろんな立場を頂いて思うことは、実際やっていくことは、全く違いますが、目指すべきところは同じであると思えます。それは、陽気ぐらし世界建設のための人材を育成すること。そして、会活動を通して自らが成人することです。

ただ、その道筋、登り方が会によって少し違うだけだと思えます。という事で、今日は少年会の講習会ですので、少年会の道筋について話をさせていただきます。

少年会活動は「縦の伝道である」といつ頃から言われて

一同は、身近な人への声かけを常に心がけ、お願いづとめやおさづけのお取次ぎを通して、一人でも多くの方へ御教えをお伝えし、おぢば帰りをして頂けるよう、年祭の動きを止める事なく、一日一日を精一杯つとめさせて頂く所存でございます。」と奏上した。

その後座りづとめ・十二下りのてをどりがつとめられ、参拝者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

いるのでしょうか。これは昭和41年の少年会の設立当初からです。これについて二代真柱様が、次のように言っておられます。「よのもと会は、横の布教の上にしつかりと手をつなぎ合って頂きたい。一れつ会なり、少年会なりは、縦の伝道の上にしつかりと杖となり柱となつて頂きたい。」(昭和42年年頭会議におけるお話) またこのようにも仰っておられます。「皆さん方の中には、親の信仰に反対しないまでも、ついて来ない子供をお持ちの方がいるだろうと思えます。教会の役員であった。が、世界へ出てしまつて帰つて来られなくなつたという子供をお持ちの方もいるだろうと思えます。長男だから教会に世話する、次男だから勝手にしろというような、冷飯扱いをされた時代もあったと思えます。しかしながら、幾人子供を育てていただこうと、親の喜びを子供に伝えること、それは最も肝心なことでありながら、難しいこととされています。難しいからと言って、ほつておくわけにはいきません」(中略)「子か

ら孫へと伝える血の流れのよ
うに、親の喜びは子供の喜び
であり、子供の喜びは孫の喜
びであるというように、この
道が続いておつてこそ道と言
えると思つたのでありま
す」(同上)と述べられてい
ます。

親子でも、夫婦でも、兄弟
でもその心は銘々違ふと教え
られます。信仰は一名一人と
言われる所以です。ですから
信仰者の子は皆、自然と道の
信仰者になるかという、本
来はそうあつてほしいですが、
必ずしもそうではありません。
ましてや、ようぼく信者家庭
のお子さん、さらにはそのお
孫さんとなつておさらだと
思います。

論達第四号に「その信仰を
受け継ぎ、親から子、子から
孫へと引き継いでいく一歩一
歩の積み重ねが、末代へと続
く道となるのである」と述べ
られてはいる通り、「縦の伝道」
とは、親から子、子から孫へ
と確実に信仰の喜びを伝える
ということに他なりません。
それは布教と同じくらい大切
なことであると教えられてい
るわけです。しかしながら、

「昔は少年会活動も盛んに
やっていたけれど、もう周り
を見て子供がいらない」とい
う声もよく聞きます。

毎年こどもの日に、総務省
から15歳未満の子供の数が発
表されます。ちょうど少年会
員層の数です。今年の15歳未
満の子供の数は、昨年より35
万人減つて1,366万人で、
これは44年連続の減少で過去
最低になったとのことでした。
私は、それでも1,400万
人近くいるのではないかと思
いました。しかし、日本の人
口に占める割合は11・1%、
つまり人口の1割しか今は子
供がいらないのです。本当に大
変な時代になつたと思ひます。
だからこそ、今いる子どもた
ち、そして、これから生まれ
てくる子供たちを、これまで
以上に大切にさせてもらいた
いと思うのです。

ではどのように信仰を伝え
ればいいのかということを考え
たいと思ひます。ある本部員
先生からお聞きしたお話です。
ある時、二代真柱様が、そ
の先生のお子さんを膝に乗せ
て「ええものやろ」と当時と
しては珍しいミニチュアの自

動車をくださいました。とこ
ろがそのお子さんは「こんな
小さいのいらん」と言つて、
ぼいっと放り投げたそうです。
先生はあまりに突然のことに
あつげにとられ息子を叱るこ
とができませんでした。する
と二代真柱様はニコニコと
笑つて「よし、そしたら今度
もつとでつかいのをやる」と
おっしゃり、後日大きなブリ
キ製の車のおもちゃを届けて
くださったそうです。そして、

「あの時、子供を叱らなかつ
たことを真柱様は喜んでおら
れた」と後に聞いたそうであ
ります。
逸話篇には次のお話ござ
います。「明治十五、六年頃
のこと。梅谷四郎兵衛が、当
時五、六才の梅次郎を連れて、
お屋敷へ帰らせて頂いたとこ
ろ、梅次郎は、赤衣を召され
た教祖にお目にかかつて、当
時煙草屋の看板に描いていた
姫達磨を思い出したのか、
「達磨はん、達磨はん」と言つ
た。それに恐縮した四郎兵衛
は、次にお屋敷へ帰らせて頂
く時、梅次郎を同伴しなかつ
たところ、教祖は、「梅次郎
さんは、どうしました。道切

ります。災救隊に初めて関
わつたのが14年前の東日本大
震災でした。災害の度に、私
はいつも家の信仰の元につい
て考えられます。私は信仰
4代目ですが、わが家の信仰
の始まりは、明治20年、初代
である曾祖父の姉婿の身上か
らで初代はそのとき16歳でし
た。にをいがけにきた布教師
に、姉婿のおたすけをお願い
しますが3日目に直出してしま
います。伝わるのは「これ
は並たいていの事やない」と
考えぬいた結果、一家そろつ
て信仰をすることになつたの
です。そして4年後の明治24
年、東海地方で濃尾地震とい
う大地震が起こりました。当
時の南海支教会より復興ひの
きしんのために有志が派遣さ
れることとなり、その中に二
十歳の曾祖父もいました。

派遣された人たちは、救援
ひのきしんと共に教えを広め
ようと、にをいがけを胸に尾
張に向かったといひます。に
をいがけを断念し帰る方が増
える中、最後まで残つたのが
初代であり、明治25年に『東
愛』という教会名称の理をい
たできます。

れるで」と、仰せられた。こ
のお言葉を頂いてから、梅次
郎は、毎度、父母に連れられ
て、心楽しくお屋敷へ帰らせ
て頂いた。という」(逸話篇
117 父母に連れられて)

子供は見たままを口にしま
す。この時の梅谷先生の申し
訳ないという気持は、子を持
つ親であれば痛いほど分か
ります。ところが教祖は少しも
気になさりませんでした。そ
れどころか「子供を連れてこ
ないとお切れるで」とお仕込
み下さつたのです。

いずれのお話からも、子供
がすることやうに目くじ
らを立てるのではなく、子供
を可愛がる大きな親心の大切
さを感じます。つまり、大き
な心で受け止める大人の度量
そして、常に子供の手を引い
てこの道を通る親の姿勢の大
切さを説かれておられると思
うのです。幼いうちから親が子
供を教会に、おぢばにと連れ帰
り、楽しみを伝えるというこ
とが、縦の伝道の上で大切な
要点だと言われている気がい
たします。

おさしづに、「もう道とい
うは、小さい時から心写さ
私の家の信仰が確固たるも
のとなつたのが災害ひのきし
んからでした。私は災救隊で
いろんな被災地に出動する度
に、よくこういつつ中を布教
し道を繋げてくださったもの
だと感じ入ります。
初代には子供がいま
したので養子ももらい、それ
が二代会長の私の祖父。その
子供は何と12人です。しかし、
皆が生まれたのはちょうど終
戦前後の混乱期でした。教会
は空襲で焼けております。決
して順風満帆ではありません
でした。しかしながら、初代、
二代、三代とその苦勞の道中
を通つてくださったお陰で、
だんだんと結構な道となり今
の私たちがいるということ。
これを知ることでの今の見え
方が変わってきます。
「一代より二代、二代より三
代と理が深くなるね。理が
深くなつて末代の理になるの
やで。(中略)理が続いて、
悪いんねんの者でも白いんね
んになるねで」(逸話篇90)
とお言葉にあるように、代を
重ねる信仰の意味はここにあ
ると思ひます。

次に、親から子への信仰の

にやならん。」(M33・11・16)

と、ありますが、小さな頃に
身に付けたものは一生の土台
となります。人の味覚は9歳
頃までに決まるという話があ
ります。人は小さい頃におい
しいと思つたものを一生好む
傾向があるそうで、それがお
ふくろの味・ふるさとの味と
言われるものになるのではよ
う。ですから、教えを伝える
ということも、小さな頃から
繰り返して「おいしく」味わ
せることが大切だと思ひます。
これは「教えを伝える努力」
と言えらると思ひます。

「伝える努力」とともに、も
う一つ大切だと思ふのが、「教
えが伝わるような努力」がで
きているかということ。す
そのためには、なぜ信仰をし
ているのか。つまり信仰の元
とその喜びを忘れずにいるこ
とが欠かせないでしょう。

現在『おぢば』では、よう
ぼく講習会という講習会がほ
ぼ毎月開催されております。
1日の日帰りや一泊二日など、
ようぼくならどなたでも参加
できます。先日、私はその世
話係をさせて頂きました。そ
今回のテーマは「教祖」。そ

プログラムの一つに、教祖伝
逸話篇を読み深めるというも
のがありました。そこで「雪
の日」という、増井りん先生
が吹雪の日のおぢばがえりの
際、欄干のない橋を渡るのに
草履を脱いで裸足で這いつく
ばつて渡つて帰り、教祖に凍
えた手を温めていただいた。
とお話を読みました。そ
の後の練り合ひの時間でした。
それまでほとんど喋らなかつ
た年配のある方が突然堰を
切つたように話し出したので
す。「信仰初代の祖父は、樺
太から引き揚げ、北海道で単
独布教から教会をご守護いた
だきました。ところが信仰三
代目の私は、小さな頃からお
ぢばで育ちながら、大学卒業
後は就職し今に至ります。今、
逸話篇を読んで、祖父のおぢ
ばがえりの大変さを改めて思
い返しました。昔は、北海道
からのおぢばがえりは片道3
泊4日もかかり、お金もない
ので、なかなかおぢばがえり
ができなかつたこと。おぢば
がえりができなかつた時、祖
父は教会の神殿にて神様にお
詫びをしていたことなどを父
から聞いたことを思い出しま

「昔は少年会活動も盛んに
やっていたけれど、もう周り
を見て子供がいらない」とい
う声もよく聞きます。
毎年こどもの日に、総務省
から15歳未満の子供の数が発
表されます。ちょうど少年会
員層の数です。今年の15歳未
満の子供の数は、昨年より35
万人減つて1,366万人で、
これは44年連続の減少で過去
最低になったとのことでした。
私は、それでも1,400万
人近くいるのではないかと思
いました。しかし、日本の人
口に占める割合は11・1%、
つまり人口の1割しか今は子
供がいらないのです。本当に大
変な時代になつたと思ひます。
だからこそ、今いる子どもた
ち、そして、これから生まれ
てくる子供たちを、これまで
以上に大切にさせてもらいた
いと思うのです。

ではどのように信仰を伝え
ればいいのかということを考え
たいと思ひます。ある本部員
先生からお聞きしたお話です。
ある時、二代真柱様が、そ
の先生のお子さんを膝に乗せ
て「ええものやろ」と当時と
しては珍しいミニチュアの自

した。そして、私は代を重ね
ながら、仕事中心で信仰に正
面から向き合つてこなかつた。
祖父がどんな思いでおぢばが
えりをしていたのか、どんな
道を歩んできたのか、もつと
祖父の話を書いておくべき
だつたと、逸話を拝読して思
いました」と、しみじみとお
話くださったのが非常に印
象に残つています。

ここにおられる方は、その
ほとんどが代を重ねた信仰を
お持ちだと思ひます。おさし
づにも「神の自由して見せて
も、その時だけは覚えて居る。
なれど、一日経つ、十日経つ、
三十日経てば、ころつと忘れ
て了う。(M31・5・9)と
あります。

元一日を忘れないよう節目
ごとに確認をして通る。その
節目が、教祖年祭・教会の記
念祭・故人の年祭・結婚・出
産・出直しなどの様々な節目
であり、元を振り返る絶好の
機会になると思ふのです。そ
してこの節目は、信仰を伝え
る上でも、とても大切な時句
であると思ひます。

私は現在、災害救援ひのき
しん隊の御用もいただいてお

るで」と、仰せられた。こ
のお言葉を頂いてから、梅次
郎は、毎度、父母に連れられ
て、心楽しくお屋敷へ帰らせ
て頂いた。という」(逸話篇
117 父母に連れられて)

子供は見たままを口にしま
す。この時の梅谷先生の申し
訳ないという気持は、子を持
つ親であれば痛いほど分か
ります。ところが教祖は少しも
気になさりませんでした。そ
れどころか「子供を連れてこ
ないとお切れるで」とお仕込
み下さつたのです。

いずれのお話からも、子供
がすることやうに目くじ
らを立てるのではなく、子供
を可愛がる大きな親心の大切
さを感じます。つまり、大き
な心で受け止める大人の度量
そして、常に子供の手を引い
てこの道を通る親の姿勢の大
切さを説かれておられると思
うのです。幼いうちから親が子
供を教会に、おぢばにと連れ帰
り、楽しみを伝えるというこ
とが、縦の伝道の上で大切な
要点だと言われている気がい
たします。

おさしづに、「もう道とい
うは、小さい時から心写さ
私の家の信仰が確固たるも
のとなつたのが災害ひのきし
んからでした。私は災救隊で
いろんな被災地に出動する度
に、よくこういつつ中を布教
し道を繋げてくださったもの
だと感じ入ります。
初代には子供がいま
したので養子ももらい、それ
が二代会長の私の祖父。その
子供は何と12人です。しかし、
皆が生まれたのはちょうど終
戦前後の混乱期でした。教会
は空襲で焼けております。決
して順風満帆ではありません
でした。しかしながら、初代、
二代、三代とその苦勞の道中
を通つてくださったお陰で、
だんだんと結構な道となり今
の私たちがいるということ。
これを知ることでの今の見え
方が変わってきます。
「一代より二代、二代より三
代と理が深くなるね。理が
深くなつて末代の理になるの
やで。(中略)理が続いて、
悪いんねんの者でも白いんね
んになるねで」(逸話篇90)
とお言葉にあるように、代を
重ねる信仰の意味はここにあ
ると思ひます。

次に、親から子への信仰の

にやならん。」(M33・11・16)

と、ありますが、小さな頃に
身に付けたものは一生の土台
となります。人の味覚は9歳
頃までに決まるという話があ
ります。人は小さい頃におい
しいと思つたものを一生好む
傾向があるそうで、それがお
ふくろの味・ふるさとの味と
言われるものになるのではよ
う。ですから、教えを伝える
ということも、小さな頃から
繰り返して「おいしく」味わ
せることが大切だと思ひます。
これは「教えを伝える努力」
と言えらると思ひます。

「伝える努力」とともに、も
う一つ大切だと思ふのが、「教
えが伝わるような努力」がで
きているかということ。す
そのためには、なぜ信仰をし
ているのか。つまり信仰の元
とその喜びを忘れずにいるこ
とが欠かせないでしょう。

現在『おぢば』では、よう
ぼく講習会という講習会がほ
ぼ毎月開催されております。
1日の日帰りや一泊二日など、
ようぼくならどなたでも参加
できます。先日、私はその世
話係をさせて頂きました。そ
今回のテーマは「教祖」。そ

プログラムの一つに、教祖伝
逸話篇を読み深めるというも
のがありました。そこで「雪
の日」という、増井りん先生
が吹雪の日のおぢばがえりの
際、欄干のない橋を渡るのに
草履を脱いで裸足で這いつく
ばつて渡つて帰り、教祖に凍
えた手を温めていただいた。
とお話を読みました。そ
の後の練り合ひの時間でした。
それまでほとんど喋らなかつ
た年配のある方が突然堰を
切つたように話し出したので
す。「信仰初代の祖父は、樺
太から引き揚げ、北海道で単
独布教から教会をご守護いた
だきました。ところが信仰三
代目の私は、小さな頃からお
ぢばで育ちながら、大学卒業
後は就職し今に至ります。今、
逸話篇を読んで、祖父のおぢ
ばがえりの大変さを改めて思
い返しました。昔は、北海道
からのおぢばがえりは片道3
泊4日もかかり、お金もない
ので、なかなかおぢばがえり
ができなかつたこと。おぢば
がえりができなかつた時、祖
父は教会の神殿にて神様にお
詫びをしていたことなどを父
から聞いたことを思い出しま

「昔は少年会活動も盛んに
やっていたけれど、もう周り
を見て子供がいらない」とい
う声もよく聞きます。
毎年こどもの日に、総務省
から15歳未満の子供の数が発
表されます。ちょうど少年会
員層の数です。今年の15歳未
満の子供の数は、昨年より35
万人減つて1,366万人で、
これは44年連続の減少で過去
最低になったとのことでした。
私は、それでも1,400万
人近くいるのではないかと思
いました。しかし、日本の人
口に占める割合は11・1%、
つまり人口の1割しか今は子
供がいらないのです。本当に大
変な時代になつたと思ひます。
だからこそ、今いる子どもた
ち、そして、これから生まれ
てくる子供たちを、これまで
以上に大切にさせてもらいた
いと思うのです。

ではどのように信仰を伝え
ればいいのかということを考え
たいと思ひます。ある本部員
先生からお聞きしたお話です。
ある時、二代真柱様が、そ
の先生のお子さんを膝に乗せ
て「ええものやろ」と当時と
しては珍しいミニチュアの自

した。そして、私は代を重ね
ながら、仕事中心で信仰に正
面から向き合つてこなかつた。
祖父がどんな思いでおぢばが
えりをしていたのか、どんな
道を歩んできたのか、もつと
祖父の話を書いておくべき
だつたと、逸話を拝読して思
いました」と、しみじみとお
話くださったのが非常に印
象に残つています。

ここにおられる方は、その
ほとんどが代を重ねた信仰を
お持ちだと思ひます。おさし
づにも「神の自由して見せて
も、その時だけは覚えて居る。
なれど、一日経つ、十日経つ、
三十日経てば、ころつと忘れ
て了う。(M31・5・9)と
あります。

元一日を忘れないよう節目
ごとに確認をして通る。その
節目が、教祖年祭・教会の記
念祭・故人の年祭・結婚・出
産・出直しなどの様々な節目
であり、元を振り返る絶好の
機会になると思ふのです。そ
してこの節目は、信仰を伝え
る上でも、とても大切な時句
であると思ひます。

私は現在、災害救援ひのき
しん隊の御用もいただいてお

るで」と、仰せられた。こ
のお言葉を頂いてから、梅次
郎は、毎度、父母に連れられ
て、心楽しくお屋敷へ帰らせ
て頂いた。という」(逸話篇
117 父母に連れられて)

子供は見たままを口にしま
す。この時の梅谷先生の申し
訳ないという気持は、子を持
つ親であれば痛いほど分か
ります。ところが教祖は少しも
気になさりませんでした。そ
れどころか「子供を連れてこ
ないとお切れるで」とお仕込
み下さつたのです。

いずれのお話からも、子供
がすることやうに目くじ
らを立てるのではなく、子供
を可愛がる大きな親心の大切
さを感じます。つまり、大き
な心で受け止める大人の度量
そして、常に子供の手を引い
てこの道を通る親の姿勢の大
切さを説かれておられると思
うのです。幼いうちから親が子
供を教会に、おぢばにと連れ帰
り、楽しみを伝えるというこ
とが、縦の伝道の上で大切な
要点だと言われている気がい
たします。

おさしづに、「もう道とい
うは、小さい時から心写さ
私の家の信仰が確固たるも
のとなつたのが災害ひのきし
んからでした。私は災救隊で
いろんな被災地に出動する度
に、よくこういつつ中を布教
し道を繋げてくださったもの
だと感じ入ります。
初代には子供がいま
したので養子ももらい、それ
が二代会長の私の祖父。その
子供は何と12人です。しかし、
皆が生まれたのはちょうど終
戦前後の混乱期でした。教会
は空襲で焼けております。決
して順風満帆ではありません
でした。しかしながら、初代、
二代、三代とその苦勞の道中
を通つてくださったお陰で、
だんだんと結構な道となり今
の私たちがいるということ。
これを知ることでの今の見え
方が変わってきます。
「一代より二代、二代より三
代と理が深くなるね。理が
深くなつて末代の理になるの
やで。(中略)理が続いて、
悪いんねんの者でも白いんね
んになるねで」(逸話篇90)
とお言葉にあるように、代を
重ねる信仰の意味はここにあ
ると思ひます。

次に、親から子への信仰の

にやならん。」(M33・11・16)

と、ありますが、小さな頃に
身に付けたものは一生の土台
となります。人の味覚は9歳
頃までに決まるという話があ
ります。人は小さい頃におい
しいと思つたものを一生好む
傾向があるそうで、それがお
ふくろの味・ふるさとの味と
言われるものになるのではよ
う。ですから、教えを伝える
ということも、小さな頃から
繰り返して「おいしく」味わ
せることが大切だと思ひます。
これは「教えを伝える努力」
と言えらると思ひます。

「伝える努力」とともに、も
う一つ大切だと思ふのが、「教
えが伝わるような努力」がで
きているかということ。す
そのためには、なぜ信仰をし
ているのか。つまり信仰の元
とその喜びを忘れずにいるこ
とが欠かせないでしょう。

現在『おぢば』では、よう
ぼく講習会という講習会がほ
ぼ毎月開催されております。
1日の日帰りや一泊二日など、
ようぼくならどなたでも参加
できます。先日、私はその世
話係をさせて頂きました。そ
今回のテーマは「教祖」。そ

子ども心に許すことのできない悪いことに思えたのでしよう。友だちがカンニングでもしたのか、掃除をさぼったのか、先生に嘘をついたのか、ともかく、くどくどと訴えたのです。(中略)

しかし最後まで私の言うことを聞いてくれた父は、静かに言いました。「人には長所もあれば、短所もある。良い所を真似して、悪い所は見ないふりをして通れば良いのだ。人の良い所を取り出して言うように・・・。」これは当たり前前のことかもしれない。しかし、幼い私の胸には、この言葉は強烈な印象として残りました。『「さんさい」S50・12月号or「折にふれて」』

りそうにないこと、そんなことをあらざらぬ家に生まれてきたのだらう、などとも言いました。そんな私の訴えを母は優しく、じつと聞いて、やわらかく受けとめてくれたのです。そして、『そんなもつたいないことを言うのではありませんよ。少しも不安に考えることはないのです。とにかく親神様にもたれて通れば、何の心配もないのですから』と、いろいろ言い聞かしてくれました。その頃の母は、『この私でも、寝ながらでも、何かお役にたつことがあるのをおいてくださるのです。寝ているのも親神さまのされることで、将来どうなるかと考えたら、居ても立ってもいられません。でも、お役にたたらんようになつたら引きとってくださいさる、と思えば、そんな不安も消えます。自分にできることを、させて貰えばいいのです。それを丈夫な体で、なぜそんなもつたないことを言うのですか』その時の、それこそ真剣だったに違いない母のまなざしは、今でも

はつきりと私の胸に残っています。『「さんさい」S49・3月号』

あの三代真柱様も、我々と変わらぬ悩みを持っておられたということ、そしてそれを優しく受け止める母親としての姿に、胸を打たれる思いがいたします。ここで言うおられることは、どれも決して難しい内容ではありません。ごく当たり前のことかもしれないが、ここぞというときに真剣に伝えることで、子供はもちろん、私たちのように聞く者の心に響くのだと感じます。

次に、『信心』と『をびや許し』についてお話ししたいと思います。私が子供の頃、怪我をすると母はよくお息の紙を小さくちぎって貼ってくれました。このお息の紙を貼ってもらうと傷がきれいに治るので、子供ながらに不思議だなと思っていました。あるとき傷が深かったので、お息の紙を貼ったまま病院に行きました。すると医者から「なんでこんな紙なんかははつとるんや。不衛生な」と母に怒っているのです。医者から見れば当然だろうと今では思いますが、信仰とは、世間から見れば理解できないという部分があるのとは否定できないと私は思います。しかしながら、それが信仰であるとも思うのです。教祖はこの道を、『をびや許し』から広められました。まずご自身でためしをかけた。そして次にご自分のお子さん、そして近隣の方にご守護を見せられ、ありがたいうお産の神様が現れたと広まっていったのです。

この『をびや許し』で大切なことは、何よりも信じ・もたれるということだと思えます。取り次ぎのお話にも、「ご守護を疑わず、親神様にしっかりと頼りましょう」といふ方もありますが、ご守護を疑わず、親神様にしっかりと頼りましょう。この先どうなるか分かりませんが、この先どうなるか分かります。しかし、何道とは、信仰の喜びを子どもに伝えていくことに他なりません。そのために、元を忘れず、常に「伝える努力」と「伝える努力」を忘れずにいたいと思っております。

もう一点、今年の『こどもおぢばがえり』について、そのおぢばに帰るといふことについてお話をいたします。今年も、7月27日～8月3日の8日間の日程で『こどもおぢばがえり』が開催されま

す。『こどもおぢばがえり』の最初は、教祖70年祭に向かう昭和29年の夏休みに「第一回おぢばがえりこどもひのきしん」にさかのぼります。その原点は「おぢばでのひのきしん」にあります。これまでは少年会活動の上で、なくてはならない役割を果たしてきたのが「こどもおぢばがえり」だと思います。

今もこれからも、子供たちの喜んでる笑顔を楽しみに、親神様、教祖、そして真柱様がおぢばへのお帰りをお待ちくださっています。北海道からの帰参は距離も、費用も、時間も、並大抵ではないでしょう。本当に頭の下がる思いであります。だからこそ大きな喜びをいただけるはず。どうか帰参予定の教会の皆様におかれましては、道の将来を担う少年会員とお帰りを待ちしております。私たちは今、教祖140年祭という節目に向かって、それぞれの教会、またようばく一人ひとりが心を定めて歩む最中であると思えます。日々の信仰実践、毎日の種まきがどこ

おかきさげに、「日々という常という、日々常に誠一つ」といふ。誠の心と言え、一寸には弱いように皆思うけれど、誠より堅き長きものは無い。誠一つが天の理。(おかしさげ)とあります。

日々常々、毎日の積み重ね、これが誠の心であり、誠より堅き長きものはないと言われます。また、この三年千日はたすけの旬、成人の旬であるとも言われます。どうか、先を楽しみに、どこかの芽生えを楽しみに、共にこの道を誠の心で通らせていただきたいと思えます。

そして、ここにおられる皆様は天理教少年会の育成会員という立場でもあります。歳をとつていようが若かろうが、子育ての経験がある方がなからうが、関係はありません。そのつとめは、教えを伝える努力と伝わる努力を忘れず、少年会を立派なようばく育成することにあります。どうかこの点を最後にお願いたしまして、本日の私の勤めを終えさせていただきます

よじき会通信

北見地区よじき会

5月14日午後1時より美幌分教会にて、「陽気セミナー」を開催した。コロナ禍以降初めての北見地区よじき会活動の再開となり、今回はおたすけ委員会細木善信委員長を御迎え、1時間の講演を聞かせていただいた。その後参加者は「幸せとは何か」をテーマに熱心にねりあいを行った。(参加者15名)



釧根地区よじき会

コロナ禍で活動が中断していた釧根地区よじき会は、6月29日午前10時より、釧路市富士見会館を会場に「陽気セ

「ねりあい」を行った。今回のセミナーが、停滞していた「よじき会」活動活性化のきっかけとなるとよう努力していきたいと思う。(参加者20名)



トピックス 私の修養科

網新 椎木 勝

私は、3月～5月に修養科に入らせてもらい、色々な地域、世代の違う方々と出会い、普段では味わえない体験をさせてもらいました。おぢばに入る前、自教会で、『毎日お

さづけをさせて頂く』と心定をしました。3ヶ月間毎日、おさづけのお取り次ぎをさせて頂くことができた。4月には同じクラスで仲良くなった方の足の上が、かんろだいの前で、ご守護を頂く瞬間を見せて頂き、改めておぢばは凄いと感激しました。

先生方の色々なお話や、おてふりの勉強も細かく修め、修養科も3ヶ月間休むことなく通らせて頂き、自分は健康で有り難いと心から思わせてもらいました。

この教祖百四十年祭の三年千日の旬に修養科に入らせて頂き、携わって頂いた諸先生や会長様に改めて感謝申し上げます。

動 静

年 祭
▼直轄所属・光武美代子の霊
様の50日祭、合祀祭が6月22
日、北見市の自宅にて大教会
長夫人祭主のもと執行された。

6月人の守護

○初席 (2名)
オホーツク 岩田 克寛

オホーツク 岩田 雄一朗

○中席者 (2名)
網 新 新 川 来 暉
網 次 安 田 桃 花

○別席傍聴願 (1名)
○おまもり下附 (1名)

育英会寄付者

伊藤博美様 (父二十年祭・母五十日祭)

三幣健志様 (四代会長夫妻 年祭)

菅原明宏様 (長女中学・二男小学入学)

女満別分教会 (二代会長20年祭)

三幣公明様 (父母娘年祭)

野村泰司様 (母五十日祭)

大教会6月の動き

1日 ようぼく一斉活動日。縦の伝道日。直轄世話人会
2日 役員会会議
3日 おはなし食堂
4日 縦の伝道日
5日 網走支部例会会場
6日 役員会会議
7日 教祖140年祭網走おたすけ委員会会議。育成部部会
8日 月次祭。縦の伝道講習会。役員会会議。連絡会。網走ようき会役員会
9日 教会長夫妻練り合い。修養科事前研修会よろこびセミナー(15日まで)
10日 会長、陽気ぐらし講座講師(岩手県奥州支部)。縦の伝道日
11日 会長、札幌方面直轄信者まわり
12日 会長、札幌方面直轄信者まわり(23日まで)こども会

立教188年人のご守護心定め
初席者 51名
ようぼく 23名
修養科修者 18名
教 人 6名
成果 (6月末現在)
10名 5名 3名 0名

22日 縦の伝道日
23日 会長、おぢばがえり。詰所23会
24日 会長、本部神殿奉仕つとめる
26日 本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日 会長、かなめ会出席。藤山重善役員、本部神殿奉仕つとめる
29日 大教会一斉活動日。縦の伝道日
30日 みそか会

仕上げの年
諭達の実動十万件
実動件数 102,104件 (6月11日現在)

立教188(令和7)年人のご守護成果表 (6月末現在)
Table with columns for church names, guardian types (初席, 中席, ようぼく, 修卒, 教人), and cumulative counts (当月, 累計).

6月 月次祭 6/12(木)
Table with columns for roles (神職講話, 賛者, 指図方, 扨者, 祭主) and names of participants.